

防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎^や」

2024 年度 開催報告書

主催：防災人材交流シンポジウム実行委員会



1 開催概要

(1) 日時・場所

日時:2025年1月11日(土)12:30から18:00まで
場所:(名古屋大学 豊田講堂(名古屋市千種区不老町))



(2) プログラム概要

○ 主催者あいさつ 愛知県防災安全局 富安 精 局長

○【第1部】報告・講演 12:30~14:20

『開催趣旨説明』

名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

『令和6年能登半島地震の現状や支援活動等の報告』

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 浦野 愛 常務理事

『他地域での防災人材の活動と連携』

TEAM 防災ジャパン

岐阜県 岐阜大学環境社会共生体研究センター 小山 真紀 准教授

静岡県 静岡県危機管理部危機対策課対策班 八木 宏晃 班長

三重県 いなべ市総務部防災課 大月 浩靖 課長補佐

『東日本大震災 被災者からのメッセージ』

公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク

宮城県~ Team 大川未来を拓くネットワーク 只野 哲也 代表

福島県~ 元富岡町社会福祉協議会事務局次長 吉田 恵子 さん

○【第2部】防災人材 大ワークショップ 14:40~16:40

~5つのテーマで分科会を開催~

- ①命を“つなぐ”備えをどう進めるか(耐震化・家具固定)
- ②被災者の生活を“つなぐ”ためにどうするか(避難所~生活再建支援)
- ③防災人材の活動を将来にどう“つなぐ”か(世代交代・世代間連携)
- ④防災人材同士の“つながり”をどう広げるか(組織間連携・地域間連携)
- ⑤過去の災害の教訓を未来に“つなぐ”ために何ができるか(災害伝承)

○【第3部】ワークショップ成果発表・パネルディスカッション 17:00~18:00

~第2部の成果発表及びディスカッション~

コーディネーター:認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

栗田 暢之 代表理事

パネリスト:名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 武田 真一 代表理事

○ 閉会あいさつ 一般社団法人日本損害保険協会中部支部 及川清志 事務局長

(3) 主催団体等

主催:防災人材交流シンポジウム実行委員会

(構成団体) 名古屋大学、愛知県、名古屋市、認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード、
あいち防災リーダー会、特定非営利活動法人あいち防災リーダー育成支援ネット、なごや防災ボラネット、
特定非営利活動法人耐震化アドバイザー協議会、あいち・なごや強靱化共創センター(事務局)

共催:公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク、一般社団法人日本損害保険協会中部支部、

株式会社中日新聞社、一般社団法人国立大学協会

協力:TEAM 防災ジャパン

2 開催結果

(1) 当日来場者数

第1部～第3部まで、合計で277名の方に御来場いただきました。(運営スタッフ除く)

(2) 啓発展示等

防災啓発及び来場者誘因のため、来場者には各種パンフレットやオリジナル防災備蓄パン等の防災啓発グッズを配布しました。

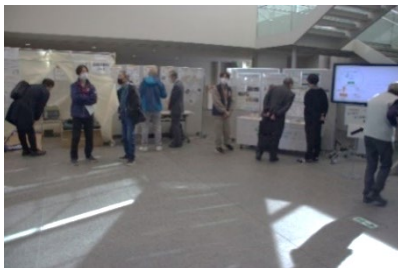
会場の展示エリアでは、昭和東南海地震や関東大震災等の新聞記事から過去の地震を振り返る「地震と世相」パネル展示のほか、主催・共催団体による防災啓発のための展示ブースを設置しました。



【受付の様子】



【パンフレット・配布グッズ】



【展示エリア全体】



【「地震と世相」パネル展示】



【愛知県 住宅計画課 展示】



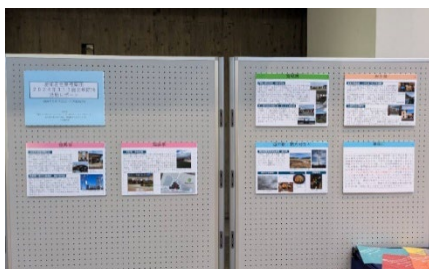
【レスキューストックヤード 展示】



【あいち防災リーダー会 展示】



【3.11メモリアルネットワーク 展示】



【中日サバイバルキャンプ・東北被災地視察レポート 展示】



【げんさいえまき 展示】

【第1部】報告・講演 12:30~14:20

○主催者あいさつ 愛知県防災安全局 富安 精 局長

主催者を代表して、愛知県防災安全局長より御挨拶申し上げます。



○『開催趣旨説明』 名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

あいち・なごや強靱化共創センター長の名古屋大学 福和伸夫 名誉教授からは、「つなぎ舎」の趣旨やこれまでの経緯、また当日の登壇者やプログラム内容等について説明をいただきました。

今年は能登半島地震から約1年、阪神淡路大震災から約30年の重要な年、防災庁設置の議論も進んでおり、本気の事前防災に取り組むことが必要なので、本日集まった防災人材同士で活発に議論し、連携して次の災害を乗り越えましょう、とのメッセージを送られました。



○『令和6年能登半島地震の現状や支援活動等の報告』

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 浦野 愛 常務理事

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤードの浦野常務理事から、能登半島地震の現状と支援活動等の御報告をいただきました。

能登半島全体の特徴として、高齢化率が高く、また公費解体や住宅修繕についても業者不足、資材高騰等様々な理由で、復興が思うようには進んでいないという現状があるとのことでした。

レスキューストックヤードは2024年1月3日から石川県穴水町にて支援活動を実施しており、被災された方の生の声を聴いて、どんな気持ちで日々を過ごされているか、どのようなサポートが必要なのか、しっかりと捉えて支援を行うことに重点を置き活動していると話されました。

避難所生活の過酷さを訴える方、在宅避難でライフラインや食料が十分でなく辛さをこらえながら生活する方、仮設住宅に移ってもストレスが溜まり健康状態が悪化する方等、被災者の声を紹介いただいたとともに、被災者がそういった様々な悩み

や課題を抱える中で、少しでも気持ちが軽くなるようなきっかけをつくる場所、困ったときにすぐに相談できる場所が必要ではないかという思いから設置した支援拠点、『ボラまち亭』について説明いただきました。

併せて、穴水町社会福祉協議会が運営する地域支えあいセンター『ささえあいセンター穴水』での見守りや生活支援、交流活動等の報告をいただきました。その中で、他者からの支援に慣れておらず自分から助



けてとはなかなか言い出せない方もいて、そういった方とどう接するかが課題となっており、被災者の尊厳を保ちつつ距離感を大事にしながら関わりを持ち、つなげられる支援制度に確実につなぐことが重要であると話されました。

6月2日 Open 『ポラまち亭』の願い
どんな時も独りぼっちにさせない
その方が本来持つ生きる力を信じて一緒に取り組む



毎週金～日曜日・11時～17時までオープン
町民来訪者：月のべ1,000～1,300人（飯設7割・在宅3割）
ボランティア受け入れ：のべ5,000人
か3割が「食欲が落ちた」「眠れない」「意欲低下」「不安」と回答
ポラまち食堂、出張ポラまち、子どもの居場所、心の相談室準備中



ささえあいセンター穴水と共に
伴走支援を継続



<特に気になること・課題点と対応のこと>
● 壁に当たってきつくない
● 「声かけ不足」と言われる
● 仮設退所後の住まいの不安
● 身体的な生活の発達しがい立たない
● 地域の縁組と共に住民の悩みがどのように変化するか
● 入居の確保が取れない人への対応
● 志を対決
● 一人暮らしの人が倒れていたらという不安

災害が発生した際の、住まいやお金に関する様々な公的支援制度は、内容や申請方法が複雑で、被災者はすぐに理解ができなため、支援者が制度を分かりやすく資料にまとめて説明したり、申請のお手伝いをしたりといった伴走型の支援が必要であり、今日つなぎ舎に参加されているような災害支援に興味のある方、ボランティアの方が事前に勉強しておくことで、こういった支援が可能になるとお話をいただきました。

○『他地域での防災人材育成・連携』

TEAM 防災ジャパンの方々から、岐阜・静岡・三重の防災人材の育成や連携について、講演をいただきました。

・(岐阜県)岐阜大学 環境社会共生体研究センター 小山 真紀 准教授



岐阜大学環境社会共生体研究センターの小山准教授より、岐阜県での防災人材の育成と活躍の場づくりについて、『清流の国ぎふ防災・減災センター』の事例を御紹介いただきました。

清流の国ぎふ防災・減災センターでは、地域で実際に活動できる知識や技能を持った人材を育成することを目指し、『げんさい未来塾』を展開しています。このげんさい未来塾は、自分が取り組みたい防災の問題を実践しながら学ぶ通年プログラムとなっており、実践に加えて、センターが実施する別の講座にオブザーバーとして参加したり、講座休憩中に塾生が自らおまけ講座を開く等、OJT の機会を通じて知識のアップデートを行ったり、プレゼン手法、講座運営手法等を学ぶ仕組みとなっているとのことでした。受入人数は年間 3～10 名程度ではあるが、学んだことを実践する場や安心して失敗できるトライアルの場を提供する、あるいは様々な研修に参加して地域と顔の見える関係を作る、そういった環境づくりを行っているとお話をいただきました。

げんさい未来塾

- ・ 地域防災・減災について主体的に担うことのできる人材を、実際の地域防災・減災の現場における実践を通じて育成する、社会向け通年プログラム。2016年に開始され、現在9年目
- ・ 受入人数は年間3～10名
- ・ カリキュラム
 - ・ 自分が取り組みたい防災の問題について、手段と目的を整合させながら主体的に取り組む
 - ・ OJTを通じて、防災知識・評価職のアップデート、人材育成・講座運営手法などを学び、顔の見える関係を構築する
 - ・ コミュニケーション・プレゼンテーション・ファシリテーション研修などを通じて、防災活動に必要なスキルを身につける
- ・ やってある場と環境づくり
 - ・ トライアルの場の提供（センター事業でのおまけ講座など）
 - ・ 心身の安全の確保（密着しない場で数を踏みながら環境づくり）
 - ・ 業がらみ（ネットワークキープ）
 - ・ 各所への人材紹介
 - ・ 福祉事業所の運営維持計画支援、外国人防災リーダー育成支援などでの活動の場提供（事前の伴走支援あり）

また、げんさい未来塾の塾生だけではなく、地元の防災士会の方や地域で防災活動に関わる方の交流の場として『げんさい楽座』を開催し、岐阜県5圏域の防災人材のネットワークを広げる活動を行っているほか、未来塾で育成された防災人材リストの公表や、県や市町村の事業での活動実績、コラム等もホームページに掲載されており、実際に自立した活動が動き出している状況をお話をいただきました。

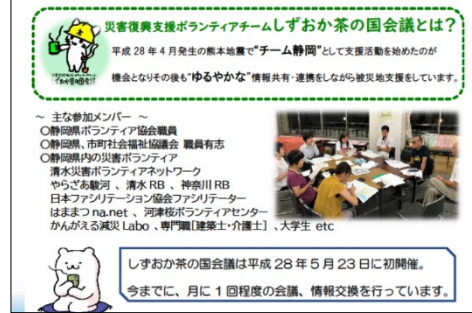
・(静岡県) 静岡県危機管理部危機対策課対策班 八木 宏晃 班長

静岡県危機管理部危機対策課対策班の八木班長からは、これまでに会った防災人材の方々とのつながりや、御自身のボランティア活動等の取組について御紹介いただきました。

まず、岩手県(東日本大震災)や熊本県(熊本地震)といった被災地支援の派遣業務を経験され、その中で多くの地元の方や他の自治体の派遣職員と交流ができたこと、また同じ静岡県から足湯のボランティアで来られていた方々とも出会い、現在もそのつながりを大事にされていることとお話いただきました。

また、御自身の取組として、静岡の地域や防災について楽しく学べる『しぞ〜か防災かるた』の普及活動や、西日本豪雨等の被災地での足湯ボランティアの活動について御報告いただいたほか、静岡県のボランティア組織が参加して情報共有等を行う『しぞおか茶の国会議(災害復興支援ボランティアチーム)』の活動や、全国の防災に関わる公務員の方とのオンライン上で交流、そして『よんなな防災会』という47都道府県のネットワークについても御紹介いただきました。

最後に、これまでの活動を通じて多くの人と出会えて良かったし、学びの機会にもなるので、行政の方もぜひボランティア活動に積極的に参加して、つながりを持ってほしいとメッセージをいただきました。



・(三重県) いなべ市総務部防災課 大月 浩靖 課長補佐

三重県いなべ市総務部総務課の大月課長補佐からは、主にTEAM 防災ジャパンの取組について御説明いただきました。

TEAM 防災ジャパンは、内閣府と連携し、全国各地で活躍する防災の担い手に有用な情報や、参加者の交流や情報交換のイベント等の情報を、ポータルサイトを通じて発信する組織です。『ぼうさいこくたい』の運営にも協力しながら、防災人材がつながる場所を提供する活動もしています。福和先生をはじめとする有識者の“アドバイザー”からの助言のもと、TEAM 防災ジャパンのメンバーがサイトの運営を行っており、大月課長補佐御自身は、“お世話係”として参画していらっしゃるとのことでした。



そのような中、さらにTEAM 防災ジャパンの愛知、岐阜、三重、静岡の東海地方のメンバーが、東海ローカルチームを結成し、メディア、行政、大学等、それぞれの場で活躍するメンバーが定期的に集まり、東海地方の防災に関する知識の習得、地域の特徴を知る、あるいは地域に根差した活動をされている人材の発掘を行っています。

防災人材にふさわしい人として、人と関わり自分からネットワークが構築するのが得意な人、防災をライフワークとして進めていける人を発掘していきたい、そして、このローカル版はまだ東海地区のみであるが、まずは東海地区で連携していろいろな分野の防災人材同士でつながりを深め、発展して全国展開していきたいとお話されました。

○『東日本大震災 被災者からのメッセージ』

東北の語り部の皆様から、東日本大震災の経験と教訓について、講演をいただきました。

・公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 武田 真一 代表理事



(公社)3.11 メモリアルネットワークは、東日本大震災の被災地で震災伝承活動を行う伝承団体の連携組織であり、この防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」には5年連続で御協力いただいています。

武田代表理事からは、今回御講演いただく只野哲也さん、吉田恵子さんを御紹介いただきました。お二人から被災者の思いやメッセージを受け取ってもらい、ぜひこの地域での災害への意識をさらに高め、備えを万全にするともに、第2部のワークショップも含め、この地域の防災の未来について活発な意見交換をし、つながりを深めて欲しいと述べられました。

・(宮城県) TEAM 大川未来を拓くネットワーク 只野 哲也 代表

TEAM 大川未来を拓くネットワークの只野代表より、当時の被災経験や現在の活動等について、御講演いただきました。

只野さんは、宮城県石巻市出身で、大川小学校の小学5年生の時に東日本大震災を経験されました。震災当日、学校近くを流れる北上川を遡上してきた津波に襲われ、当時学校にいた78名の児童のうち、74名が亡くなりました。校舎のすぐ近くには、普段から授業で登ったこともある裏山があり、最短1分で登ることができたのに、日頃の意識や備えが足りず、その裏山ではなく川の方へ避難してしまいました。只野さんは、大川小学校での出来事は「人災」であり、確実に救えた命が失われてしまった、と語りました。



また、震災後に取り組んだ活動として、子どもたちの心のケアや、大川小学校の校舎保存の活動について御紹介いただきました。仲間とともに全国各地で校舎保存に向けた意見表明を行い、特に2015年3月に開かれた大川地区住民による校舎保存を巡る意見交換会では、これからの未来の子どもたちのためにも大川小学校を遺したいと地域の方にお話しされ、翌年の2016年3月に震災遺構としての保存が決まった、とのことでした。



2021年7月には震災遺構として一般公開が始まりましたが、校舎自体の老朽化も進む中で、維持管理や保全の担い手の育成が課題であり、今後どういう形で校舎を遺していくべきか、遺族や地域の方、多くの関係者と意見交換をしながら、保全に向けた取り組みを行っていること、そして、そのような課題解決のため、2022年2月に『Team 大川未来を拓くネットワーク』を立ち上げ、若い世代がもっと大川という地域に入って、自分の良さを生かして仲間とともに活動できるようなコミュニティづくりの取組を行っている、と御報告いただきました。



最後に、“未来のいのちを救う”、“子供の笑顔を守る”、“皆と向き合い心育む”という『Team 大川未来を拓くネットワーク』の基本理念について御紹介いただいたとともに、この東海地域で防災活動をされている会場の方々にもぜひ大川に足を運んでいただき、新たなコミュニティづくりの活動に関わっていただければ、とメッセージをいただきました。

・(福島県) 元富岡町社会福祉協議会事務局次長 吉田 恵子さん

富岡町社会福祉協議会の元事務局次長 吉田恵子さんからは、原発事故からの避難の経験、そして避難を余儀なくされた町民の方々を支えつないだ、御自身の支援活動について、御講演いただきました。



当時、富岡町社会福祉協議会で勤務されていた吉田さんは、社協の事務所の中で地震を経験され、そしてその翌日の朝6時前、避難指示を告げる防災無線が聞こえ、すぐに避難しなくてはいけない状況となりました。御自身も職場にあったカバンと携帯電話と充電器だけ持ち、歯ブラシや着替えもない中で、町民皆が車で一列になって、避難先である川内村を目指して行ったという状況で、この日から6年間、家に帰れなくなるとは誰も想像していなかった、ということでした。

最初は川内村、その後は郡山のビッグパレット福島が避難所となったが、実家や親戚、知人等を頼って県外に避難された方も多く、この避難者とどうやってつながり、支援をされたのか、お話いただきました。

まず、第1弾としては、町民電話帳を作成したことです。当時の個人情報保護法の壁があり、連絡先の入手が難しかったが、町と社協で協力し、支援につなげるための電話帳を作成されたとのことでした。

また、第2弾としては、被災者に情報を届ける臨時災害FMを始めたことです。最初はビッグパレットの避難所の中で聞くことのできるミニFMから始め、その後『おたがいさまFM』という臨時災害FMを開局されましたが、その際、当時の上司を説得すること大変苦慮されたエピソードをお話いただきました。

臨時災害FMは役目を終え2018年3月末で閉局になりましたが、ラジオの機材は、南海トラフ地震が危惧される和歌山県のコミュニティ放送局であるBababa FMに引き継がれており、その機材を使って、中学生や高校生が将来、臨時災害FMの担い手となるような取組がなされていると御紹介いただきました。



最後には、熊本地震での避難所の映像を見てフラッシュバックが起きた御自身の経験をお話いただき、自分も被災しながら支援の仕事をしなければならない状況になった時は、とてもつらい精神状態にあると思うので、本当に気を付けてくださいと、会場に集まった防災人材に対してメッセージを送られました。

【第2部】防災人材 大ワークショップ 14:40~16:40

今年度のつなぎ舎では、防災・減災対策を未来につなげるためにどうすれば良いか、防災人材が一堂に介し、一緒に考えるための大ワークショップを開催いたしました。

5つのテーマごとに分科会を設け、NPO、ボランティア、自主防災組織リーダー、民間企業、行政や社会福祉会職員等、様々な方々・団体から御参加いただき、皆で議論・意見交換を行いました。

(分科会①) 命を“つなぐ” 備えをどう進めるか【耐震化・家具固定】

能登半島地震では、家屋の倒壊により多くの方が亡くなり、住宅の耐震化や家具固定の重要性が改めて認識されました。分科会①では、愛知県の耐震化や家具固定の進捗状況や補助制度、現状の課題等について行政の担当者から御報告いただいた上で、耐震化と家具固定、それぞれの対策が進まない原因と、対策を前に進めるアイデア・方法について、参加者で議論しました。

<分科会①企画コーディネーター>

○進行:あいち防災リーダー会 三河ブロック 岡田 公夫 代表

○話題提供:「県内の住宅耐震化・家具固定の現状・課題について」

愛知県建築局公共建築部住宅計画課 松田 猛 主査

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 中山 裕史 主事

○ファシリテーター:

特定非営利活動法人耐震化アドバイザー協議会 伊藤 文隆 理事長

有我 高司 副理事長

あいち防災リーダー会 伊藤 勲 研修部長

防災ポラネット守山 鷲見 修 代表



(分科会②) 被災者の生活を“つなぐ” ために何ができるか【避難所～生活再建支援】

災害関連死を防ぐためには、自ら声を上げられない被災者を見逃さず、発災初期～中長期にわたり継続して被災者の困りごとを丁寧に読み取り、確実に支援につなぐことが必要です。

分科会②では、能登半島地震等過去の災害における避難所や避難生活の実情や課題を参加者で共有し、避難所避難者や避難所外避難者の困りごとをどのように把握し、どのような方法で必要な支援につなげていくか、グループワークを通して議論し、参加者が従来持っている「気づく力」を高めました。



<分科会②企画コーディネーター>

○進行・ファシリテーター:

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

浦野 愛 常務理事

災害ボランティアコーディネーターなごや

椿 佳代 副代表

名古屋市市民活動推進センター

伊藤 葉子 所長

千田 育久透 所長補佐

(分科会③) 防災人材の活動を将来にどう“つなぐ”か【世代交代・世代間連携】

日頃から防災活動を行う組織にとって、世代交代しながら活動を継続することは大切である一方、難しさもあります。分科会③では、学生等の若い世代から現役で活動する方まで、様々な世代や団体が集まり、防災人材の活動を将来に“つなぐ”ためにどうすれば良いか、世代交代や世代連携に向けた解決のためのアイデアを出し合い、楽しく意見交換を行いました。



<分科会③企画コーディネーター>

○進行:あいち防災リーダー会 知多ブロック 原 真理 代表

○話題提供:「若い世代による防災活動、世代間連携の取組紹介」

名古屋大学 防災サークル 榎 鈴木 明日香 さん

公益社団法人3.11メモリアルネットワーク 阿部 任 さん



○ファシリテーター:

特定非営利活動法人あいち防災リーダー育成支援ネット 伊藤 善之 理事長
あいち防災リーダー会 野村 昭男 会長
一般社団法人日本損害保険協会中部支部 及川 清志 事務局長
認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 林 大地 さん

(分科会④) 防災人材同士の“つながり”をどう広げるか【組織間連携・地域間連携】

被災地では、様々な民間組織が支援活動を行うことが定着してきていますが、そのような支援組織の情報共有や連携の不足により、支援が効果的に行き届かないという課題も生じています。分科会④では、NPO やボランティア団体、企業、行政等の被災地の支援を行う多様な組織が連携する必要性と、この地域の現状（災害中間支援組織の設立に向けた動き等）について参加者が共有し、どうすれば連携を深めることができるか、グループ内で意見交換を行いました。

<分科会④企画コーディネーター>

○進行: 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 浜田 ゆう 事務局長

○話題提供:

「災害中間支援組織とは何か、なぜ必要なのか～組織連携の成功事例の紹介～」

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 栗田 暢之 代表理事

「災害中間支援組織の設置に向けた愛知県の現状や課題、今後の見通し」

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 大野 幸嗣 課長補佐

「民間組織との連携において行政が抱える課題」

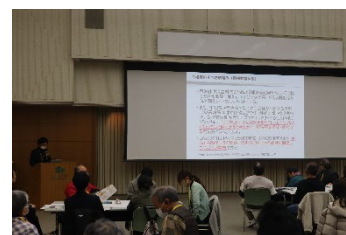
名古屋市防災危機管理局防災企画課 山川 雅也 課長補佐

○ファシリテーター:

名古屋みどり災害ボランティアネットワーク 岡田 雅美 代表

いなべ市総務部防災課大月 浩靖 課長補佐

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 松林 紀子 主査



(分科会⑤) 過去の災害の教訓を未来に“つなぐ”ために何ができるか【災害伝承】

過去の災害の教訓から私たちが何を学び、将来の災害にどう備えるかによって、多くの命を守ることに繋がります。分科会⑤では、東北の災害伝承活動の現状や課題等の報告から、過去の被災体験を語り継ぐことの大切さや難しさを学び、この地域での災害伝承活動の発展のために何ができるか、グループで話し合いました。



<分科会⑤企画コーディネーター>

○進行: 災害ボランティアコーディネーターなごや 代表 高崎 賢一 さん

○話題提供:

「災害伝承継続の課題について」

公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 事務局長 中川 政治 さん

「災害伝承活動の大切さについて」

Team 大川未来を拓くネットワーク 代表 只野 哲也 さん

「愛知県内の慰霊碑紹介「災と Seeing」等の紹介」

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 主査 山本 真一郎 さん

○ファシリテーター:

あいち防災リーダー会 青木 八束 相談役

あいち防災リーダー会海部ブロック 井上 誠 代表、横江 恵納 さん

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 森本 佳奈 さん



【第3部】ワークショップ成果発表・パネルディスカッション 17:00～18:00

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤードの栗田 暢之 代表理事の進行のもと、第2部のワークショップ成果発表と、パネリストによるパネルディスカッションを行いました。第2部ワークショップの各分科会の代表者の方に発表していただき、その内容を基にパネリストからコメントをいただきました。



分科会①「耐震化・家具固定」の発表者は、耐震化が進まない原因として、市民が耐震化の必要性を感じていない、費用負担が大きい、家の中の整理整頓が大変、の3点を挙げ、メディア等で避難所生活の過酷さを日頃から伝え、住宅の耐震化の必要性を訴えることや、リフォーム等の施工業者が耐震補強の提案を積極的に行うこと、市民に意識を高めてもらうためのワークショップを開催する等を解決策として提案していただきました。

家具固定については、固定の方法が分からないこと、助成金や固定器具の取付事業等の支援制度の周知が足りないことを原因として挙げ、解決策の一つとして、名古屋市消防局による戸別訪問の事業を例に、行政や町内会等も巻き込んで個々の住宅へアプローチし、啓発していくことを提案いただきました。

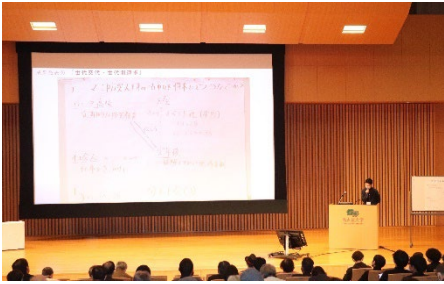
福和先生は、行政からの金銭面での支援が足りないという点と、能登半島地震では避難生活の長期化等で災害関連死が直接死を上回っている点を課題に挙げ、住み続けられる家にしておかなければ特に高齢者は発災後の生活への負担が大きい、命を守るために何が必要かを改めて考えて欲しいと述べられました。



分科会②「避難所～生活再建支援」の発表者は、避難所の中の困りごととして、トイレが屋外にある、暗い、怖い、和式で使いづらい等様々なトイレの問題を挙げ、ライトの設置、洋式トイレへの切り替え、トイレの環境整備への男性の参加、ナースコール代わりに防犯ブザーの設置等、いろいろなアイデアを発表していただきました。また、在宅や車中泊避難者の情報を収集するためにはアセスメントシートの作成が必要であるが、身近な住民が行政（福祉）と一緒に訪問すると、安心感が生まれ、悩みが聞きやすくなり良いのではないかと提案いただきました。

武田先生からは、避難所の設備面での充実がまず重要な課題である一方で、避難所の問題は女性や子ども、障害者等、人権の問題でもあり、普段の生活では見えにくい人と突然一緒に生活するのでどうしても混乱するとの指摘がありました。その上で、宮城県東松島市の赤井市民センターでは、女性にとって避難所がどのような環境であるべきか劇を作り、事前に住民と共有していた結果、東日本大震災ではその劇に乗っ取って避難所運営を行うことができた、という事例を紹介いただき、日頃からのそういった形で住民意識を高めていけると良いとコメントされました。





分科会③「世代交代・世代間連携」の発表者からは、世代間がつながり防災活動が継続されていくためには、小中高生、大学生、社会人、定年後と、世代ごとのライフスタイルに応じたアプローチが重要との意見が出されました。例えば、小中高校では各段階で効果的な防災教育を受け、大学では自ら防災イベントへ参加する、時間的に制約の多い社会人は企業 BCP 等の仕事を切り口に機運を高める、そして、定年後はそういった今までの経験を生かして地域で活動したり、学校での防災教育に関わったりすることで、上手く世代間の連携が生まれていくのではと発表いただきました。

福和先生からは、学校の中で命を守るための防災教育ができていれば、おのずと世代間連携が進むはずなので、今後はこのつなぎ舎に教職員の先生方のような教育に携わる方がもっと参加してディスカッションしてもらいたい、と述べられました。



分科会④「組織間連携・地域間連携」では、災害中間支援組織に求められる機能や役割について議論されました。発表者からは、同じグループ内に自治会の役員、NPO、民間企業、行政と職種の違うメンバーが集まり、それぞれが防災訓練やフットケアサポート、保険の算定業務等、異なる支援の能力を持っていて、その能力を上手く使うために、災害中間支援組織にどのような機能を求めるかということ議論したと報告いただきました。

そして、災害中間支援組織に求められる機能として、被災者のニーズを継続的に把握する機能、被災者ニーズと支援者とのマッチング機能、様々な支援を広域的に差配できる調整機能を挙げられました。

栗田代表理事からは、東日本大震災を契機に全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JVOAD) が設立され、能登半島地震でも約 420 の民間団体が支援に入ったが、それらの団体の横串を刺して連携していくことは本当に難しく、つなぎ役として県域単位での災害中間支援組織が必要、愛知県ではまだ設立されていないので皆で知恵を出しながら連携し、設立に向けて準備していきたいとコメントされました。



分科会⑤「災害伝承」の発表者からは、災害伝承活動の継続していくための課題として、伝承活動に対する補助金等の支援が減少傾向にあること、若者・次世代への継承ができていないこと、伝承を自分事として捉えられないこと等を挙げていただきました。そして、解決のアイデアとして、常設の補助制度を設ける等、恒常的な資金づくりの仕組み、また民間企業やメディアと協力し話し方の研修を行う等、個人で伝承活動を行う方の人材育成の仕組みを作ることを提案いただきました。



武田先生からは、東日本大震災の復興構想 7 原則や、災害対策基本法でも、次世代への災害伝承の重要性が位置付けられているが、それを実現するような支援がしっかりとされていないのが現状であり、考えていかなければならないと述べられました。そして、伝承者だけでなく、伝承に触れた人がその話を家族や周りと共有するだけでも災害を伝え継ぐことができるので、今日家に帰ったら子供や親に伝えて欲しいし、それをお手伝いするのが我々 3.11 メモリアルネットワークの取組なので、ぜひとも活用してほしいとお話いただきました。

最後、福和先生がこれまでの議論を総括され、“防災ネズミ算”
と言うように、自分が防災で大切と思う事を周りに伝え、それを繰
り返せば一気に広がっていく、そのような人と人とのつながりが重
要なので、今回東北と、さらに静岡・岐阜・三重にも広がりが生ま
れたように、地域をつなぎ、世代をつなぎ、歴史をつなぐ、このつな
ぎ舎を今後も続けていきたいと、締めくくられました。



○ 閉会あいさつ 一般社団法人日本損害保険協会中部支部 及川 清志 事務局長

共催者を代表して、一般社団法人日本損害保険協会中部支部の及川清志 事務局長より閉会の挨拶を
いただきました。

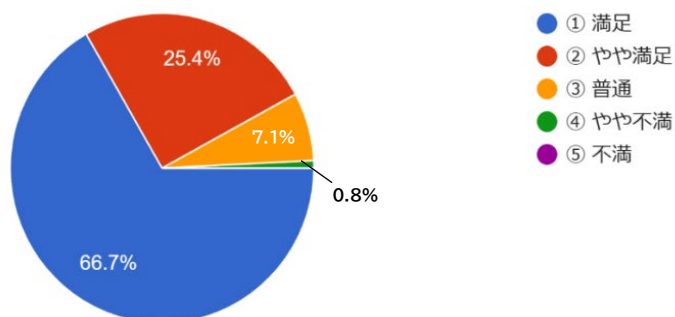


(4) アンケート結果等

御来場された方へのアンケート結果は以下のとおりです。

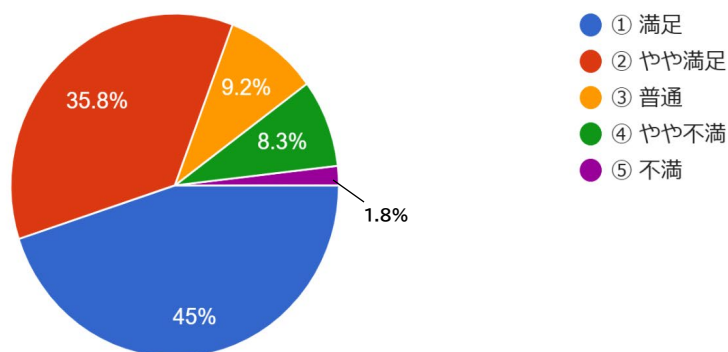
【第Ⅰ部】報告・講演について

■ 満足度



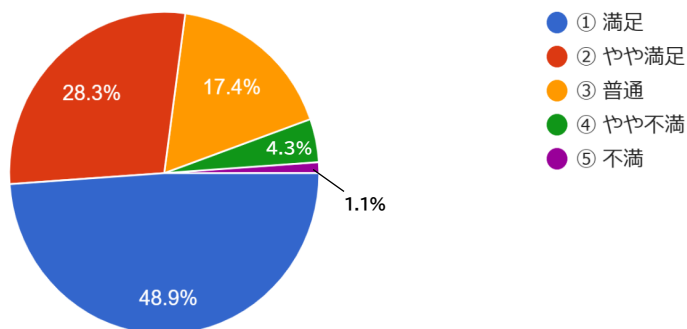
【第2部】防災人材 大ワークショップについて

■満足度



【第3部】ワークショップ成果発表・パネルディスカッションについて

■満足度



第1部では、被災地の現状や過去の災害の教訓を参加者と共有できたとともに、他地域での防災人材の育成や連携について学ぶ機会となりました。また第2部、第3部では多様なテーマで積極的な意見交換を行うことができ、防災人材のつながりの大切さを再確認することができました。

組織や世代を超えてあらゆる主体がつながり、この地域で災害時にお互いに協力し合う関係をさらに広げていくために、来年度以降も引き続き、この防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」を開催したいと考えております。

以上